

にこやかに論ずその口調も相変わらずで、こうなると弟子の身分では異論など出せる筈もない。

「承知しました。ではせめて対等の立場でいさせてください。恩師に不敬な態度をとるなど、長老たる前に人の道理に外れるというもの。」

「でうかい？じゃあそつしようか。」

にこにこ穏やかな笑顔で師匠は申し出を快諾してくれた。

敵しいのか優しいのか、いまいちポイントの判らない受け答えも相変わらずで、ようやくミンウも驚きと緊張で吊りはなしていた頬を緩めることができた。

と、なると聞きたい事は山とある。一体何をしていたのか何処にいたのか、何よりもその——しかしここはミシディアの長として筋を通すのが先。何せ、長老たれとたつた今やんわりと叱られたばかりである。数多ある疑問をひとまず置いておき、ミンウは長老として襟を正した。

「本日は如何様な用件で？」

「うん、ここから二里くらい離れたところにね、家を建てて十年くらい前から住まわせてもらっていたんだけど、最近なんだから人が集まり出してきちゃって、そろそろちょっとした集落に

なつてしまひそうなんだ。そうなるとミシディアの長老に話を通さない訳にはいかないなど、そういう事理由で顔を出させて頂いたとそんな用件。」

飄々と言つてのけた師匠に、弟子は襟を正したその舌の根も乾かぬうちに目鼻が落ちるんじゃないかと言うほど唾然とした自分が長老になったのは五年程前だ。つまりその随分と前に、師は既にこの地に戻つていたことになる。

「じゅ…十年ですか…？」

「うん、君が長老になつたのは知つてただけどね、会うべきかどうか迷つてしまつて。不義理をしてすまなかつた。」

へこり、と頭を下げた師の顔を慌ててあげさせる。

「と、とんでもない！何か事情があつたのでしよう、それは伺いませぬ。灯台下暗しとはよく言つたものだ、そう思つていただけです。」

「ああ、もしかして探してしてくれたのかい？ますます済まない事をした。」

下げたまま頭の角度がさらに深さを増した。

「頭を上げてくださいクルーヤ殿！貴方がそのようにされる謂れなどなにもございせんから！」

そうかい？と言つて小首を傾げる仕草がまるで年齢を感じさ

せない。自分よりずっと年上の筈なのだが、この人は時折こうして少年のように邪気のない所作を見せる。昔から謎の多い人ではあつたが、どうやらそこもまるで変わつていないようだ。ただ、変わった…らしい…ことといえは…

「そういう事情でしたら承知いたしました。勿論問題など何もありません。むしろ、このミシディアの地が貴方にとつての安住の地になつたというなら、こんなに喜ばしい事はありません。それでその…こちらの、お子は…」

ようやく、その話を振れた。

ずっと師の傍らにいる、栗色の髪をした小さな男の子の――

「うん、私の息子。縁あつて所帯をもつたんだ。」

「おお…！」

これはなんと喜ばしい事か。かつては女性に心惹かれるどころか、他人と長く付き合うという事すら避けていた節のある師が、妻を娶り家庭を築いたというのだ。

「おめでどうございます…！今からでもテラを呼びつけ祝いの宴を開きたい程です。」

「大袈裟だなあ。もう産まれてから七年経つてるよ。さ、挨拶なさい。」

そう言つて師は、先ほどから物珍しそうにきよろきよろと周

りを見回していた息子にそう言つた。言われて少年はミンウと付きの者に向き直り、少したどたどしい口調でこう言つた。  
「えつと…こんにちは、はじめまして。――です。」

+

そうじゃな。確かに、そう名乗つた。

……セオードルと。